

1999年6月広島豪雨災害に関する住民意識調査

崇城大学 大学院工学研究科 ○中井 正道
 崇城大学 工学部 環境建設工学科 村田 重之
 崇城大学 工学部 環境建設工学科 渋谷 秀昭

1. まえがき 1999年6月29日広島市および呉市で集中豪雨により大きな災害が発生した。広島県ではこれまでもしばしば大きな災害を経験していると同時に、急傾斜危険地域 5,960 箇所、土石流危険渓流 4,930 箇所といずれも全国一位の災害の危険箇所を抱えており、それだけに防災対策も精力的に行われてきているものと思われる。しかし、今回以前と同様な災害が発生しており、何が災害の原因になっているのかに大きな興味を覚えた。そこで、今回被害を受けた地域の住民へのアンケート調査を実施し、災害時の状況や行動、住居の安全性認識、原因や特徴について考察する。

2. 調査方法 災害時の状況と土砂災害に対する住民の意識を探るため、今回、土石流の被害を受けた川沿いの屋代川、荒谷川、古野川流域および山裾の観音台団地および譲羽団地の5箇所を対象としてアンケート調査を実施した。調査項目は①災害に対する一般的な意識を尋ねる設問群、②被災時の状況や行動に関する設問群などである。調査方法は、上記地域に居住する住民を対象として留置法で実施した。配布総数は 230 で、回収数(率)は 139(60.4%)である (図-1)。

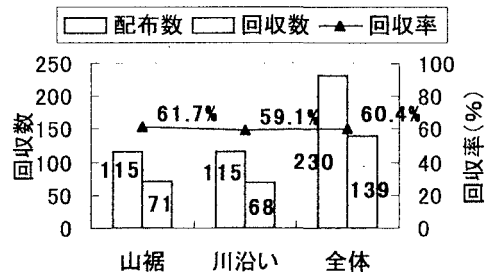


図-1 アンケート配布・回収一覧

3. 被災状況 今回の災害による住居の立地場所別被災状況を図-2に示す。今回の災害では、川沿いが7割強の被害を受けており山裾では2割弱が被害を受けている。今回の災害では、川沿いのほうが被害の多い結果となっているが、これは、今回の災害は土石流災害が多発したために川沿いで多くの被害があった為である。

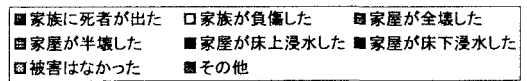


図-2 住居の立地場所別被災状況

4. 今回の土砂災害の予想 今回の災害の予想に関しては、図-3に示すとおり予想していたが12%、予想していなかったが84%と、大部分の人

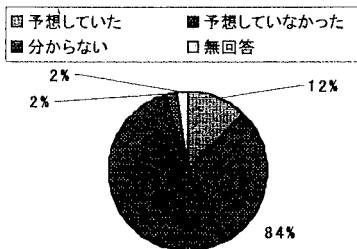


図-3 今回の災害の予想

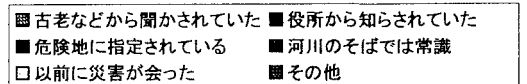


図-4 災害を予想していた理由

が今回の災害を予想していなかった事になる。

また、災害を予想していた理由としては、図-4に示すように「古老などから聞かされていた」23%、「役所から知らされていた」5%、「危険地に指定されている」9%、「河川のそばでは常識」14%、「以前に災害があった」9%となっている。また、災害を予想していなかった理由としては図-5のように、「これまで災害がなかった」21%、「災害が起こる事は考えられない」17%、「河川改修などが行われていた」4%、「役所などから危険地と知らされていなかった」30%、「砂防ダムが設置されている」22%等となっており、役所等から危険地と知らされていなかった事や、これまで災害が無かったという事、砂防ダム、河川改修などの施設面での安心感等により、危険地へ住居を構えているという認識が欠落している結果となった。

5. 住居の安全性意識 現在の場所に住居を構えた理由としては、「地価が安いから」や、「災害の恐れは無いと思ったから」等が挙げられる(図-6)。また、今回の災害に対する住居の安全性を住居の安全誠意識別に見ると住居に不安を感じている人ほど今回の災害では危険であったという結果となった(図-7)。さらに、災害後の現在地への居住を居住年数別に見てみると、居住年数が30年以上においては「出来れば引っ越したい」は1サンプルしかないのに対して、30年以下では「出来れば引っ越したい」、「早く引っ越したい」の割合が高くなっており、近年の宅地開発におけるリスクの現れだと思われる(図-8)。

6. 結論 この地域に住んでいる人々が住居を構える時には、まさかこのような災害が起こるとは夢にも思っていなくて住居を定めていることが明らかになった。しかし、おなじ地域でも先祖代々からこの地に住んでいる人々は比較的安全な場所に住居を定めて災害から免れているようである。災害が発生すると様々な防災工事が行われるが、災害後の対策もさることながら、今後は危険な場所に宅地の開発をさせない行政指導が必要であるように思われる。

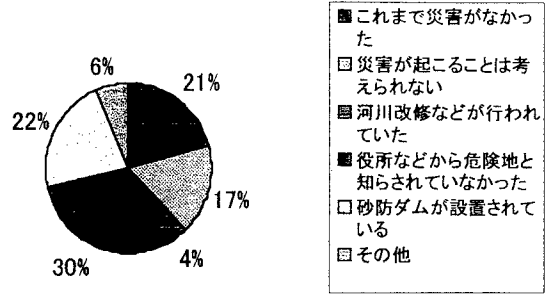


図-5 災害を予想していなかった理由

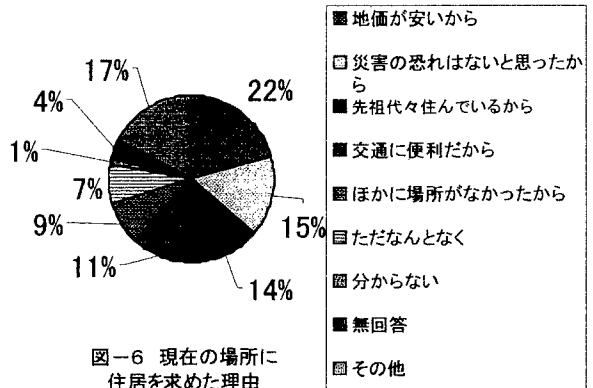


図-6 現在の場所に住居を求めた理由

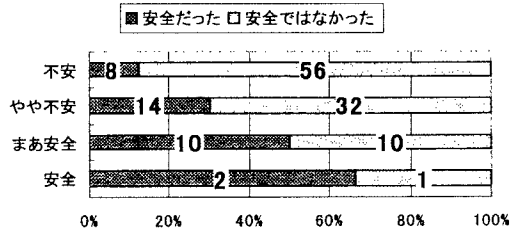


図-7 住居の安全性意識別に見る今回の災害における住居の安全性

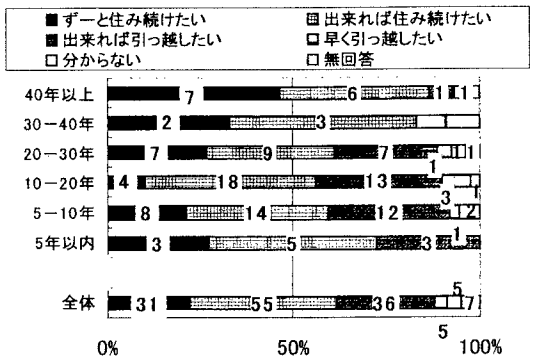


図-8 災害後の現在地への居住(居住年数別)